

家庭でできる!!

原木ヒラタケの栽培



原木栽培のヒラタケは大形で肉質が充実し、野性味のある香りが特徴です。ヒラタケは他のキノコに比べると菌糸の生育が早く、キノコが発生するまでの期間が短いので、接種年の秋からの収穫が楽しめます。

お料理

あっさりとした味と香りが特徴で、汁物、天ぷら、鍋物、きのこ飯、シチューなど素材の組み合わせ方によって、和風・洋風いずれの料理にも向きます。大量に収穫されたときには、天日で乾燥して保存しておくことで、自家用として長く楽しむことができ、また贈答用としても喜ばれます。



ヒラタケの原木栽培方法

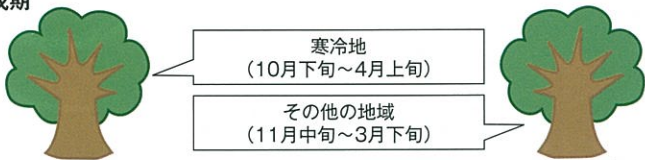
STEP 1 原木

エノキ、ポプラ、クルミ、ヤナギ、ブナなど材質の柔らかい樹種が最適です。ほかにモチ、ハンノキ、ホオノキ、カキ、シデ類など、ほとんどの広葉樹が利用できますが、クヌギやミズナラ、クリなどは不向きです。長木栽培は直径10~20cm程度、短木栽培は20~50cmまでの太さの原木が利用できます。

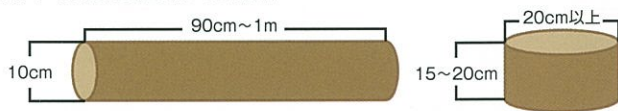
STEP 2 伐採、玉切り

伐採は、秋の紅葉期から春の新芽が出る頃までの間に行います。長木栽培は、伐採後1~2ヶ月間乾かした後に適当な長さ(90cm~1m)に玉切ります。一方、短木栽培は、伐採後あまり乾燥させないで玉切ります。ヒラタケは木口面から発生しやすい特性があるので、大径木は短木栽培が有利です。

●伐期



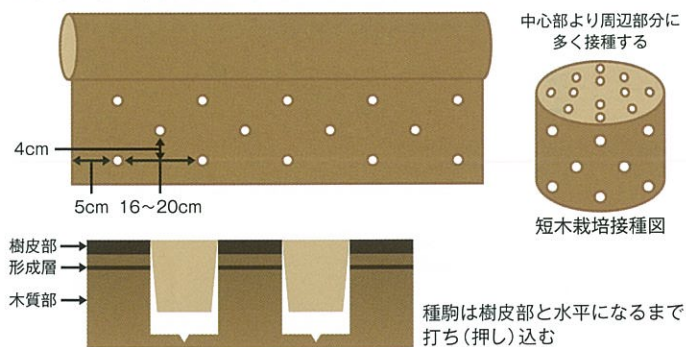
●原木の大きさ(玉切った場合)



STEP 3 接種

接種は、4月下旬頃までに行います。接種の間隔は、縦方向約20cm、横方向約4cmの千鳥植え(下図)にします。接種数は、長さ1mの原木の場合は、直径の約3倍(直径10cmの場合は30個)になります。種駒は9.2mmのキリを使用し、穴は25~30mmの深さに開けます。短木の場合は、木口面と樹皮面に下図の要領で接種します(オガ種駒を木口面に挟む方法もあります)。なお、いずれも玉切り後はできるだけ早く接種してください。

●接種方法(千鳥植え)



STEP 4 仮伏せ

仮伏せは直射日光を避け、保湿・保温を図るために行います。ホダ木(キノコ菌を接種した原木)周囲をワラ、ムシロ、シェード等で覆い、種駒が完全に活着するまで時々散水を行います。

●横積み

ワラ・シェード等で覆う



長木

●縦積み

ワラ束で周囲を覆う
接種面をお互いに合わせて
2本1組として仮伏せを行う

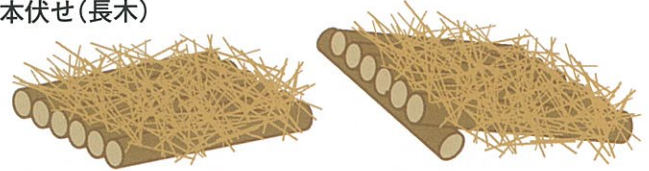


短木

STEP 5 本伏せ

梅雨明け頃を目安に本伏せを行います。長木は日光がチラチラ入る林内の平らな場所に、また短木は水はけの良い畑や庭先などに下図の要領で伏せ込みます。なお、いずれも雨が当たるようにしてください。

●本伏せ(長木)

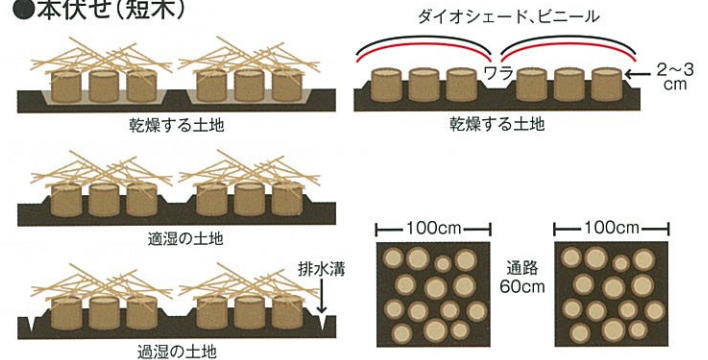


地伏せ

片枕接地伏せ

直射日光の当たる場所では、上面にワラを乗せたり、シェードを張る

●本伏せ(短木)



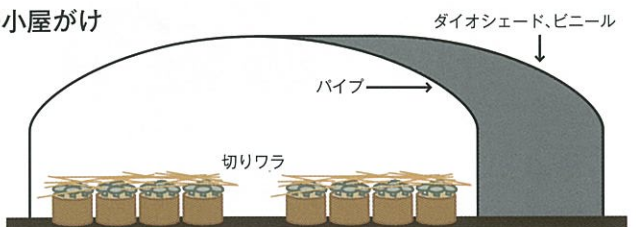
STEP 6 発生

本格的な発生は接種翌年の秋からですが、菌糸が順調にまん延したホダ木は、接種年の秋から発生します。発生前は、小屋かけを行うとともに、ホダ木表面をワラで覆い、散水をたっぷり行います。キノコの発生中は2~3日おきに軽く散水します。気温が低下し、キノコの生育が遅くなったら、ビニール等で保温と保湿に心がけます。キノコは湿度が低下したり、強い風が当たると生育が抑制されるので、生育中の管理には十分注意してください。

STEP 7 発生時期

キノコの発生時期は、秋の気温が5~18℃頃です。平地では遅くとも10月中旬頃から、また標高500m以上の地帯や、寒冷地では9月下旬頃から発生が始まります。発生は10~15日程度の周期で繰り返します。

●小屋かけ



STEP 8 収穫後の管理

平地では、温暖年には12月の下旬頃まで発生を続けます。発生が終了したホダ木は伏せ込んだままの状態にして、日覆いの裾を開けて通風を図り、やや乾燥気味に管理してください。春からはシェードを残してビニールを除去し、直射を防ぐとともに、雨がホダ木に当たるように管理してください。キノコの発生は数年間続きます。